

# 氣がつく、手が届く、行き渡る

— 教育陶醉境論のあとに —

倉 橋 惣 三

夏の月の夜の楽しい親子づれにうつとりさせられて、教育陶醉境の一文を草した（本誌前號巻頭）わたしは、白日眩しい程に照りつける夏のバラック託児所の一隅、陶醉境どころでない忙しい保育を見た。と書き出しただけで、教育陶醉境を引き込まそうとしているのだと、早合點されては困る。あれはあれ、これはこれ、決してむじゆんもしようとつもないのである。のみならず、更にいつてみれば、これにはこれの大きな陶醉境がある。忙しさを意識にのぼせていないからである。子らのため専念一途、そこに一寸の隙間もない。すきまのない生活は即ち陶醉境である。たゞ、夏の夜の月の下に、うつとりとしている陶醉とは、必ずしも同じでない。その意味においては、陶醉なんかしてはならないということにもいえるのである。

なるほど——と今始めて感ずるまでもなく、うつとりしている暇なんかありはしない。泣く、叫ぶ、あばれる、こらぶ、喧嘩をする、怪我をする。さては、はなをたらず、おしつこをする。陶醉を通り越して目がくらみ、うつとりどころ

か氣が遠くなる位である。月を仰いで足どりも軽く、子どもらに負けずに聲張り上げて唱歌をうたつてゆく美的陶醉境とは、まつたく夜と晝、月と太陽との差がある。何と名をつけようか、現實的陶醉境とでもいおうか。現實という語と、陶醉という語とが調和しないとすれば、現實境とだけでもいい。實は現實こそ、一番没頭させられる世界かも知れない。少くも、没頭しなければ取り逃がす世界である。

その現實境はいつでも忙しい。陶然となんかしてはられない程、たえず動いている。めまぐるしい程動いている。それに追いかけられたら、それこそ目がまい、手がふるえ、足がすくむ。その動を追い越せば、動にして動でなくなる。動と丁度テンポがあつた時、靜ではないがすなり／＼と、停では勿論ないが落ちついた、その人としての快さが味わられる。うつとりしてはいるが共に、うつかりしてはいる。うつかりしてはいるから、忙に追いまわされぬ。追いまわされぬものは、その時その時、いついつでも、箇中の生活に忙を味つている。

忙しい託児所に、そういう人を屢々見るのである。また、そういう人でなければ、一日も託児所にいられない。少くも託児所を楽しめよう。

動の現實の中でも、最もめまぐるしい忙に、あわてずに處していけるために、三つの缺くことの出来ない條件がある。氣がつくこと、手が屈くこと、行き渡ることである。同じようであらずつ違うところがあり、三つそろわないと完くならないようである。

氣がつくとは、周邊への反應の速いことで、その甚しい反對は、のろであり、下品な言葉を許されるならば、つくはつくでも、ぼんの字のつく方である。さて、氣はたらしきの敏鈍は心理的素質によるところもある。そうして、大きなところからみれば、敏必ずしも優にして、鈍必ずしも劣というに限らない。また神經の素質なら、いずれにしても咎むべくもない。たゞ、直覺の不足、熱意の缺乏、責任の微弱といつたことで、もつている程の敏さえが閉ざされ、鈍らされ、殊に、我れを忘れないうために、人のことに氣がつかぬとあつては、するいというよりも、到底保育箇中の味に到り得ないものである。

幼児を愛するという。しかも事毎の實際に氣がつかないでは、茫然として、とりとめもなく幼児を眺めて喜んでゐるに過ぎない。幼児の心身に起る眼前の動に對して、何等適切な接觸ももち得ず、あとから／＼愛のあと拂いをしてゐるに止

まる。子どもにとつて、感謝に苦しむ愛である。

手が屈くとは、氣がつくよりも一段と實際である。氣はついても、手はふところに、ポケットに、高々さしのべられるところがあるのでは、實際の役に立たぬ。ところで、之れ亦、手のつけ根あたりには素質的差違があるのかも知れないが、安閑だらりと不精が習性になつてゐることもあろう。殊に、口が屈いても手の屈かぬことが少くない。口と手と雙方八丁というが、實は口八丁手一丁にも及ばぬことが多い。或は口が八丁も届けば、手はその反比例に手びかえするものかも知れない。

手はよく屈くが、何しろ短い二本の手、その行き届く範圍は狭きに限られ易い。それへもう一つの條件は、行き渡ることである。口で行き渡らせるには大きい聲を出せばいい。巧妙な摺聲機を用いれば尙容易である。手を行き渡らせるには自ら一方に偏する。そこで、行き渡るためには、どうしても足まめでなければならぬが、足が足だけで廣く動いたとて目あても立たぬ。足を働かす前の目の行き渡り、目の行き渡る前の心の行き渡りがなくてはならないのである。

氣に敏鈍の差があり、働かすにまめ不精の差がある以上に、心の行き渡りの廣狭は、人によつて大に差があるものらしい。身邊數人の子らには、よく氣がつき、よく手が届くが、一組數十人となると、もう行き渡らない人がある。やさしいいじらしい程熱心な人ではあるが、たつた數十人が任せられ

ないとあつては、母には適しても先生には適しないということになるかも知れない。

行き渡るというのに、場所的のひろがりの外に、時間的のひろがりの意味もある。目の前のことだけで、その次の動きの、遠大の計でなくとも、こうすればこうなる位の將來が少しも考えられない人があつて、可愛がり行届くことはあつても、あとさきまるで行き渡らない如きである。

保育は、一日々々現實の仕事である。現實の仕事である以上、現實的陶醉が伴わなくてはならない。それなしに、たゞうつつとしていて、一日の保育も出来ないのである。その點託兒所に限らない。幼稚園でも全く同じである。

この頃の保育の教えに、なるべく幼児に餘計の世話をやかぬことが屢々いわれる。それは、教育という上では、全くその通りでなければならぬ。世話をやき過ぎて、幼児の自分の生活とその發達を妨げることは、最も非教育的である。わが國の舊い弊としても、充分いましめられる必要がある。しかし、それを言譯にして、保育者のぼんやりや、不精や、狭わいしは少しもゆるされるものではない。充分氣がついていて調整するのである。最もまめやかに環境的に行届いて直接にはみだりに導き過ぎないのである。狭くひとり／＼にくつつき切りになつたりしないが、全群を把握して、ひとりの迷子もつくらないのである。こうしたこと、干渉しない保育の方が、干渉する保育より、どんなにか却つて忙しい譯のもので

あろう。この意味で、氣がつく、手が届く、行き渡るの三つは、所謂新保育原理による新保育者にも、決して缺かれない必須條件である。

たゞ、まゝにならぬは、美的陶醉の人、屢々現實にまめやかならず、現實にまめやかな人、往々にして、美的陶醉の味を解せず、そこで理想の保育者たることが、なか／＼むすかしいという話になる。が、實は、そんなむすかしいことでもあるまいと思ふ。前にいつた如く、この一見相反する如き境地は、決して本質的にむじゆん、しよう／＼とつしないものだからである。いずれも共に、子どもにおいて與えられることだからである。子どもに忠實に接觸することなしに、この、どつちの心境を得ることも出来得ない。子どもに忠實に接觸するものは、時に應じ、即ち子どもに生活状態に應じて、いずれの心境かになり、いずれの心境にでもなれるのである。但し、若し強いて、この二つの先後を如何に分つべきかと問われるならば、現實の方が先きだと、躊躇なく答えるであらう。その方が、眞に子どもに忠實な心から起り、又、眞に子どもに生活に忠實なり得るからである。

もう一度、あの夏の夜の月の下で子らと歌い歩き、笑い歩いていた母を思い出してみよう。彼の女は、あれから狭い家へ歸つて、子どもらを丁寧な腰かせつけた後で、月下に三人の子どもの浴衣を洗濯したのではなからうか。現實か陶醉か、古句にいう。——『寝せつけし子の洗濯や夏の月』。

(八月十三日)